「みせすががきの風かほる　すだれかかげてほととぎす　鳴くや皐月のあやめぐさ……」

夏の宵の吉原に見世清掻の三味線の音が響き、客達之遊び心を掻き立てた。

見世清掻とは、遊女が張り見世で爪弾く三味の歌と音色だ。

磐音は吉原の大通り、仲ノ町を左手に曲がった。

新亀楽は角町の奥にある半籬、中どころの妓楼だった。

張り見世には四人の遊女がいて、格子戸から呼びかけてきた。

「お侍さん、上がってくんなまし」

疲れきった女の声だった。

「お目当てがあんなさるか」

遣り手が磐音の前に立った。

「ここではなんとよばれているか知らぬが、吉原の外ではおしずと呼ばれていた女に会いたい」

「おしずさんだね」

遣り手は磐音の風体をじろじろと眺めた。

磐音も、吉原では野暮と薄汚いのは嫌われることくらい、死んだ琴平に時折り付き合わされていたから、承知していた。

その夕暮れ、古着ながら白紬と夏場袴を身につけ、髪も撫でて付けてきた。それが長身の磐音によく似合っていた。

「おしずさんの里名は静川だよ」

「では、静川さんに会いたい」

「揚げ代は、二分二朱、それになにやかにやで一両はかかるよ」

磐音は頷いた。吉原に言ってくれと幸吉に頼まれたときから覚悟していた出費だ。

「刀は預からせてもらいますよ」

遣り手が磐音から大小を受け取ると、玄関から二階の座敷に案内した。

通りとは反対側の暗い座敷だった。それでも二間続きで半間ほど開けられた隣部屋に夜具が敷かれてあるのが、艶めかしく見える。

「お客さん、酒を持って来るかい」

「できれば、静川さんに会いたいのじゃがな」

「吉原では、待つのも楽しみの一つですよ」

「ならば、酒をもらおうか。肴はいらぬ」

（野暮天の勤番侍め）

という顔をした遣り手が、

「畏まりました」

と馬鹿丁寧に返事をし、

「静川さんは売れっ子でねえ、今もお客が二人ほどかち合っているんですよ。ちょっと待って下さいな」

と言い置いて、姿を消した

磐音の頼んだ酒が運ばれてきたのは四半刻もあとのこと、さらに半刻、一刻と待たされた。

することもない。

磐音はちびちびと酒を舐めながら、ただ待った。

五つ半頃になって、ようやく廊下から足音が近づいていた。

「お客さん、お待たせたわね」

障子をわずかに開けた女が磐音の顔を見ると、そう言った。だが、座敷に入ってくる気配はない。

豆造の母親は、吉原の半籬の妓楼ながら、板頭をいきなり張るだけに、顔に憂いを漂わせた美形だった。体つきも四歳の子があるとは思えないほどにしなやかで、立ち姿に独特の風情があった。それらが遊客の琴線に触れて売れっ子になったのだろう。

女の全身には、男たちの歓心を集める自身が満ち溢れていた。それが静川を、おしずを輝かせていた。

「お侍さんは今晩が初めてね。もう少し待ってくれない」

そう言った静川は、廊下に消えようとした。他の客のところに顔を出すのだろう。

「待ってくれ、おしずさん」

女が立ち止まり、今一度磐音の顔を確かめるように見た。

「知り合いじゃないわね」

女の顔に怯えのような翳が走った。

「それがし、深川から参った。豆造のことで、おそめちゃんと幸吉どのに頼み事をされた者だ」

おしずの顔に戸惑いが浮かび、その迷いを振り切るように座敷に入ってきた。

「おそめちゃんから頼まれたの。豆造はおそめちゃんの長屋にいるの」

磐音が頷いた。

すると、おしずがべたりと畳に尻を下ろした。

遊女の顔がおしずに戻った。

「お侍さん、おそめちゃんの頼みごとって、なんですか」

磐音は事情を告げた。

肩を落としたおしずはしばらく黙りこくっていた。

両眼が潤み、涙が浮かび上がってきた。

「弓七の馬鹿は、我が子一人も育てられないの……」

その声音は静かな怒りを含んでいた。

「おしずさん、ご亭主にも先ほど会った。弓七さんは、そなたがいなくなった痛手からまだ立ち直っておらんのだ」

「だからといって、豆造を他人に預けて酔いつぶれている理由にはならないわ。なんて情けない」

磐音も返す言葉がない。

思い沈黙の後、

「分かった」

とおしずが言った。

「お侍さん、豆造のために着物を貰いに来てくれたのね」

「そういうことだ」

「お侍さんも吉原の仕来りをまんざら知らないじゃないでしょう。遊んでいって。帰るときに、約束のものを渡すから」

磐音はおしずの顔を見た。

その顔はすでに女郎の静川に戻っていた。

「ならば、こういたそうか。しばらく、そなたの酒の相手をしよう。それでどうだ」

「亭主の弓七に情けなんてかけることはないのよ。私がほしけりゃあ、抱く。ここでは男と女の関わりはそれだけよ。それが真実であとは嘘っぱち」

女郎の静川は、挑むような目で磐音を見た。

嫣然とした瞳に憂いが漂い、なんとも風情があった。

「おしずさん、ここではそうかも知れぬ。だがな、遊里の外には外の約束ごとがある。それがしは幸吉どのとおそめちゃんに頼まれたことを果たしたい。それだけのことだ」

「豆造に会ったの」

「泉養寺の境内でな」

「豆造は、元気でしたか」

磐音が頷くと、静川に戻ったおしずが手を叩いた。すると引き付け部屋から注文をとりに先ほどの遣り手が顔を見せた。

「おきみさん、新しい酒と肴をくださいな」

「あいよ」

と磐音の顔をちらりと見た遣り手が顎を振って、あちらの客はどうするのかという表情で静川を振り見た。

「待たせておいて」

静川の返答は素っ気ない。

「いいのかねえ」

と言いながらも遣り手が消え、すぐに新しい酒と肴の膳が届けられた。

磐音とおしずは、深川のことなどを話ながら酒を飲んだ。

「なんだ、お侍さんは、金兵衛長屋の住人なの。なら、おこんちゃんを知っているのね」

おしずは深川生まれの女に戻っていた。

「先程も今津屋を訪ねて、会ってきた。いや、大家どのに紹介されて今津屋の雑用を請け負っておるので、親しくしてもらっておるだけだが」

「おこんちゃんは、私のあ姐さんみたいな人だったの。遊びから手習いまで、何でも教えてもらったわ」

「手習いとはなんだな」

「踊りのお師匠さんが一緒でねえ、おこんちゃんは、師匠に跡取りにならないかって誘われるくらい上手だったのよ。私は駄目。なんでも中途半端なくせに、その気になるのだけは早いの。弓七と所帯を持ったのも、知り合って一月もしないうちだった。最初は、真面目な鍛冶職人だったのよ。あの人の造る鋏は切れ味がいいって、仕立て屋さんも贔屓にしてもらったくらい……」

おしずは空の杯を口に持っていった。

磐音が酒を注いだ。

「お侍さんに酒を注がせるなんて悪いわね」

そう言っておしずは一気に飲み干すと、磐音に杯を渡した。

「あの人が博奕狂いだって知ったのは、豆造が生まれた頃のことよ。のめり込んでしまってて、気がついたときには、払いきれない借金が残っていたの。親方には何度も破門されるし、兄弟弟子たちには見放される。毎日のように賭場の借金の取り立てが長屋に来るのに、あの人は逃げ回ってばかり。私がここに身を落とすしか道はないじゃない」

「弓七どのは腕のいい職人だと聞いた。立ち直りのきっかけさえあればいいんだがな」

ふいに障子が開けられた。

戸口に、遊び人を絵に描いたような凶悪な面構えの男が懐で立っていた。懐に合口でも呑んで、その柄に手を置いている感じだ。

「てめえ、いつまで待たせる気だ」

男が静かに言った。

「こちらのお客様と話がついたら、戻るわ」

「女郎、火焔の寅三を舐めんじゃねえぜ。こんな妓楼なんぞ、踏み潰すのはわけもねえだ」

おしずが磐音に救いを求めるように見た。

「ここはよい、あちらの相手をしてやってくれ。都合のよいときに、約束のものを届けてくれればよい」

そう磐音に言われたおしずは、こくりと頷いて立ち上がった。

宮戸川の仕事に間に合えばいい、そう思い直した磐音は徹夜を覚悟した。

ごろりと手枕で横になった。

数日内に江戸を発って、豊後関前に戻るになる。

（奈緒はどうしておるのか）

上司の命とはいえ、磐音は奈緒のあにを上意討ちにした人間であった。そんな人間が妹ノなおと一緒に暮らせようか。

（父上はどうしておられるか）

国家老の命で蟄居閉門になった坂カザキ正睦が、実高様の許しもなく、四を言い渡されることもあるまい。

磐音はそう思いたかった。

だが、これまで宍戸派が繰り返してきた所業を顧みるとき、ありうる話だった。

（待てよ）

と磐音は頭裏に浮かんだ考えに慄然とした。

正睦は、藩財政を立て直す役目を負い、すでに着手していた。それがために守旧派の宍戸文六の勘気を被ったと考えられた。

（もし不正に借り出された一万六千五百両の借り入れを父上の責任にして、始末するようなことがあれば……）

一番恐れる事態であった。

何時の間にか、磐音は手枕で眠り込んでいた。

どれほど眠ったか、悲鳴で目を覚ました。

磐音はおしずの声を聞いたように思えた。

「てめえ！何者だ」

火焔の寅三の叫びも響いた。

磐音が障子を開けると、廊下を遊客や女郎たちが逃げ惑い、階段を番頭や若い衆が駆け上がってきた。

磐音も騒ぎのほうに急ぎ向かった。

すると開け放たれた座敷で、合口を構えた火焔の寅三と裁ち鋏を構えた弓七が睨み合っていた。

寅三のかたわらには胸を血塗れにした静川ことおしずがよろめき立っていた。それを見世の男衆が取り巻いていた。

弓七が新亀楽に姿を見せていた。

磐音の話に女房恋しさが募ったのか、おしずを殺して一緒に死のうとおもったのか、部屋に飛び込みざま、裁ち鋏でおしずを刺した感じだ。流血の具合からみて、思い切り深く刺していた。

「弓七どの、気を静めよ」

磐音が輪の外から叫んだ。

「うるせえ！」

絶望の眼差しに血走らせた弓七が鋏を構えて、寅三の懐に飛び込んでいった。が、相手は修羅場を潜って生きてきた渡世人だ。

弓七を十分に引き付けておいて、合口を振るった。

非情で容赦のない一撃だった。

「おまえさん！」

よろめきながらおしずが亭主のそばに寄ろうとした。

「ちぇっ！刺された相手だぜ。なんて愁嘆場だ」

寅三はそう吐き捨てると、おしずの肩を引き戻して、

「勘違いするねえ。客が楼に上がっている間に、てめえはおれの女郎だぜ」

「おまえさん……」

おしずはよろめくと、血塗れになってよろめき立つ弓七のもとに寄ろうとした」

「火焔の寅三の前でふざけた真似をしてくれるじゃねえか！」

磐音は若い衆の間を掻き分けて前に出ようとした。

が、寅三の合口が再び閃き、おしずの首筋からぱっと鮮血が飛び散った。

「やりやがったな！」

弓七が寅三に駆け寄ろうとして、おしずと絡み合い、

どどっ

とその場に倒れ込んだ。

（どうしてこんなことになったのか）

磐音は悲しげに夫婦の終末を見ていた。

火焔の寅三は酷薄な眼差しを二人に投げると、若い衆に、

「どけ、どきやがれ」

と命じた。

寅三の妙に落ち着いた迫力に圧された若い衆が下がった。

磐音が寅三の前に出たのは、そのときだ。

「なんでえ、さんぴん。怪我をしたくなけりゃあ、下がってな」

「そうもいかんでな」

磐音の声も沈んでいた。

亭主の弓七がなぜ吉原に来たのか、はっきりした理由は分からなかった。が、鋏の鍛冶職人が仕事で作った道具を持って、女郎に身を落とした女房を傷つけた以上、行き先は知れていた。

磐音が許せなかったのは、火焔の寅三の、人を人とも思わないその仕打ちだった。

「この者たちには、４つになる子がおる。その仇を討たせてもらおう」

「素手で火焔の寅三の合口の前に立とうという勇気だけはほめやろう」

そういった寅三が合口を腰だめにして、突っ込んできた。

磐音は左足を後方に引くと、寅三の合口との間合いを読んだ。

刀槍の修羅場を潜ったものだけができる技だ。

半身に開き、切っ先を左の脇に呼び込んでおいて。寅三の右腕を磐音は自分の左腕に抱え込み、右手で下から押し上げるようにした。

ぼきり！

骨が折れる音が響いて、寅三の悲鳴が口から洩れた。

それにも構わず、いわねは腰車に寅三の体を載せて、跳ね上げた。

虚空に寅三が舞い。

と敷居の上に叩きつけられた。

そのとき、大階段を駆け上がって、吉原を取り仕切る四郎兵衛会所の半纏を小粋に着込んだ若い衆が飛び込んできた。

磐音が大門を出たのは、夜明けのことだ。

「坂崎様、面倒に巻き込まれなすったな」

会所の頭分の四郎兵衛が見送ってくれた。

磐音の持つ風呂敷包みにおしずの衣類が何枚か重ねられて入っていた。

静川ことおしずは、騒ぎが一段落としたときには虫の息で、四半刻あまり苦しみ抜いた末に息を引き取った。

そして、その直後に弓七も死んだ。

磐音は新亀楽から会所に連れて行かれて、調べを受けた。

磐音には隠すべきことはなにもない。会所の長たちに、吉原を訪ねた事情を正直に告げた。

「坂崎様、そんな事情ならなにも新亀楽に上がって無駄遣いすることもなかったんだ。会所を訪ねて話してくれればねえ、すぐにも手配しましたよ」

と当代の四郎兵衛に言われた。

「坂崎様、調べて分かったことだが、火焔の寅三は日光の代官所からも手配書が廻ってきている極悪人でね、お手柄でした」

「手柄もなにも、豆造のことを考えたら、無性に腹が立ってしまいました」

四郎兵衛が頷き、

「寅三はひとつだけいいことをしてのけたかもしれまえんよ。おしずと弓七は生き残ったら、この世で地獄が待っていました。それがこの世界のきまりです。だが、夫婦手を撮り合って三途の川を渡れるんです。見方を変えれば、幸せなことかもしれませんよ」

「また円があればお目にかかりましょうか」

その言葉に見送られて、磐音は衣紋道を八丁土手へと上がっていった。